

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 15 日現在

機関番号：22604  
 研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2010～2012  
 課題番号：22530675  
 研究課題名（和文） システム再生産に寄与する心理メカニズムの検討—社会変革の促進に向けて—  
 研究課題名（英文） Study on psychological mechanisms that sustain and reproduce social system  
 研究代表者  
 沼崎 誠 (NUMAZAKI MAKOTO)  
 首都大学東京・人文科学研究科・教授  
 研究者番号：10228278

### 研究成果の概要（和文）：

システムを維持・再生産させる心理メカニズムについて、実証研究をおこなった。結果として、官僚や男性サブカテゴリーや偏差値に基づく大学生の相補的ステレオタイプの適用や、それに基づく偏見が、システム再生産に寄与することが見いだされた。さらに、システム肯定化や自己肯定化や博愛プライムや再カテゴリー化が、システムの再生産に寄与する心理メカニズムの活性を抑えることが見いだされた。社会変革の促進の観点からこれらの結果について考察した。

### 研究成果の概要（英文）：

We conducted empirical research in psychological mechanisms that would sustain and reproduce social system. We found that application of complementary stereotypes of elite bureaucrats, subcategories of male, and undergraduates who have high- or low-social status and prejudice toward them contribute to system-reproduction. We also found that system-affirmation, self-affirmation, philanthropism-priming, and recategorization reduce activation of these psychological mechanisms. We discussed these findings in terms of acceleration of social change.

### 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
2012 年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：システム正当化・システム脅威・ジェンダーステレオタイプ・ステレオタイプ化・偏見・外国人偏見・存在脅威管理理論・相補的ステレオタイプ

### 1. 研究開始当初の背景

現代において社会変革の必要性が唱えられることは多い。その一方で、現状の変革には困難さが伴う。変革を行うことに対して、現状から多くの経済的利益を得ている人々が抵抗し、その変革を阻むことはよく指摘されることである。しかし、社会的に低地位に

いて、一見すると不利益を受けているように見える人にも現状のシステムの変革に反対するといった行動が強く見られる。この傾向は、経済的利益の観点からでは説明できず、心理的要因が寄与していることが考えられる。

研究代表者は、これまで、特定の状況にお

いてジェンダー・ステレオタイプの適用や性役割的偏見が強まり、結果として伝統的ジェンダー・システムの再生産に寄与してしまうことを、明らかにしてきた。その中で、ジェンダーとは一見無関係に見える状況でも、ステレオタイプの適用や性役割的偏見の増大が生じることも見いだしてきた。死すべき運命という脅威が顕現化した状況や日本のシステムに脅威となる国が顕現化するだけで、伝統的ジェンダー・ステレオタイプの自己/他者への適用や性役割的偏見が強まることがある。このようなジェンダーに関わらない脅威が、なぜジェンダー・システムを再生産させるようなステレオタイプや偏見を生み出すのであろうか。近年、システムの再生産に寄与する心理メカニズムの解明に関して理論的/実証的な検討がなされるようになってきている。重要な理論としては、存在脅威管理理論やシステム正当化理論や不確実性管理理論が挙げられる。それぞれの理論は独自の主張をしているが、共通した部分は、人には心理的/物質的に依存しているシステム（文化的世界観や現状のシステム）を維持しようとする動機があり、このようなシステムに脅威が与えられると、システム維持動機が高まり、その防衛手段としてシステムの再生産を促すような行動が取られやすくなるという指摘である。防衛的手段の1つとして、システムの中の役割によって規定されたステレオタイプとそれと関連した偏見が用いられることが実証研究で示されている。

システムの再生産に関わる心理メカニズムとして、心理的/物質的に依存しているシステムの維持動機という仮説構成概念を設けて研究することのメリットは、一見すると無関係な脅威とシステム防衛行動の関係（例えば、軍事的脅威となる外国の顕現化と性役割的偏見）を明らかにできる点にある。しかし、それだけにとどまらず、必要な社会変革を促進するような状況を作り出すための示唆が得られる点にもある。なぜなら、一見無関係な脅威とシステム防衛行動が結びつくとするならば、一見無関係に見えるシステム肯定化が、社会変革を阻害する不必要なシステム防衛行動を低下させる可能性が想定できるためである。この点についての実証研究は少ない。そこで、この点についても実証研究をおこない、社会的変革に向けた有効な方略を探る研究を目指した。

## 2. 研究の目的

社会変革に対しては多くの抵抗が伴う。変革に対する抵抗の1つの要因として、現状のシステムへの固執を生み出す心理メカニズムがあると考えられ、本研究では、この心理的メカニズムの解明を行う。想定する心理メカニズムとして、心理的/物質的に依存してい

るシステムを維持しようとする動機と、他者や自己に対するステレオタイプの適用や社会的弱者に対する非難といった手段を取り上げ検討する。これまでのジェンダー・システムの再生産の知見を活かして、ジェンダー・システムの再生産で見いだされた、この動機と諸手段が他のシステム再生産にも適用できるかを検討することが第1の目的となる（研究成果(1)）。

さらに、このようなシステム再生産に寄与する心理メカニズムを止揚する手段を解明するための研究をおこなう。具体的にはシステム肯定化や博愛プライムや再カテゴリー化といった手法を用いて、システムによって規定されるステレオタイプの適用やそれに伴う偏見がどのように変化するかを検討する。このことにより、必要なシステム変革を促進するための条件について明らかにすることが、本研究の第2の目的となる（研究成果(2)）。さらに、実証研究と理論的検討から、社会変革を阻む心理学的メカニズムの解明と、必要な社会変革を促進するための手がかりを得ることが最終的な目標となる。

## 3. 研究の方法

文献研究を踏まえて、主に実験を用いて実証的な検討をおこなった。具体的手続きは、研究成果とあわせて記述する。

## 4. 研究成果

### (1)ステレオタイプ/偏見のシステム維持機能

#### (1)-① 官僚ステレオタイプ

(1)-①では日本において高い地位を占め、「有能だが冷たい」というステレオタイプが持たれている高級官僚ステレオタイプがシステム維持機能を果たしているかを検討した。(1)-①-1では、独立変数として、日本の脅威と考えられている北朝鮮 (vs. EU) について考えるかを操作し、従属変数としては官僚のイメージを温かさ次元と有能さ次元で評価させた。結果として、新聞を相対的に読んでいる参加者、および、女性参加者において、北朝鮮について考えると、キャリア官僚の有能だが冷たいという相補的で両面価値的なステレオタイプの適用が強まることを見いだされた。この結果は、システムに依存し軍事的な脅威に対して敏感な参加者において、軍事的脅威が顕現化すると、国家システムを担う地位の高い集団に対してステレオタイプを適用しやすくなることを示唆している。

(1)-①-2では、高級官僚への批判の形態が現状のシステムの正当性認知に及ぼす効果を検討した。「官僚は冷たく庶民の気持ちかわからない」という官僚ステレオタイプに一致した批判と「現在の官僚は無能」というステレオタイプに不一致な批判とで、どちらが

有効かを検討した。結果として、従属変数として測定したシステム正当化認知においても正当的世界観でも、官僚は無能だというステレオタイプに不一致な批判を受けると、批判をされなかった場合や官僚は冷たいというステレオタイプに一致した批判を受けた場合に比べ、批判とは反対に日本の現状は良いという認知が高まるという結果が得られた。この結果は、現在の政治システムを担う人物が、ステレオタイプと不一致で、担う価値がないと批判することは、システムの正当性認知の低下ではなく、システム正当化動機へと結びつき、結果として、現状を肯定的に捉えるようになり批判が批判として機能しなくなることを示唆している。

#### (1)-②偏差値に基づく大学生ステレオタイプ

(1)-②-1 では、システムへの脅威が顕現化したときの、偏差値に基づいた大学成員の相補的で両面価値的なステレオタイプの適用について検討をおこなった。実験1では相対的に低い地位の大学の男女大学生を参加者とし、中国という脅威的外集団の顕現化を操作して、相対的に地位の高い外集団大学生と相対的に地位の低い内集団大学生のイメージを、温かさ次元と有能さ次元で評定させた。結果として、女性参加者においてのみ、相対的に地位の高い外集団大学成員の「有能だが冷たい」という相補的で両面価値的なステレオタイプの適用が強まることを見いだされた。実験2では相対的に地位の高い大学の男女大学生を参加者にして、同様の実験を行った。結果として、内集団の高地位大学生の評定においても、外集団の低地位大学生の評定においても、脅威が顕現化すると、相補的で両面価値的なステレオタイプの適用が強化されることが見いだされた。これらの結果は、偏差値に基づく大学生ステレオタイプ、特に有名大学のステレオタイプが、システム正当化機能を日本において果たしていることを示唆している。

(1)-②-2 では、死すべき運命が顕現化したときの、偏差値に基づいた大学成員の相補的で両面価値的なステレオタイプの適用について検討をおこなった。死すべき運命が顕現化したときに文化的世界観が強まることが知られているが、システム脅威と同様の結果が得られるとすれば、相補的で両面価値的なステレオタイプに伴った階層的システムが文化的世界観として機能していることになる。実験1では、相対的に地位の高いA大学の男女大学生を参加者にして、実験2では相対的に地位の低いB大学の男女大学生を参加者にして、実験3では中地位のC大学の男女大学生を参加者にして、死すべき運命の顕現化の有無を操作した上で、相対的高地位A大学の学生と相対的低地位B大学の学生のイメージについて、温かさ次元と有能さ次元で

評定をさせた。結果として、システム脅威の効果とは異なり、高地位A大学の参加者でも（実験1）、低地位B大学の参加者でも（実験2）、高地位大学生の「有能だが冷たい」という、また、低地位大学生の「能力は低いが温かい」という相補的で両面価値的なステレオタイプの適用が、死すべき運命が顕現化すると弱まることを見いだされた。有能さと温かさの評価の関係を調べたところ、全ての実験において、統制条件に比べて死すべき運命の顕現化条件では、2つの次元の評価が正の相関を持つようになる方向に変化することが見られた。この結果は、死すべき運命が顕現化すると、社会的地位に基づいた両面価値的な評定ではなく一面価値的な評定になること、つまり、単純な好悪（偏見）に基づいて両次元とも同じような評定をするようになることを示唆している。

#### (1)-③男性サブカテゴリー・ステレオタイプ

(1)-③-1 では、専業主夫に対するイメージを、作動性および共同性といった観点から探索的に調査した。専業主夫は主婦に比べて作動性が低く評定された。伝統主義的性役割観者は、主夫は主婦よりも望ましくないと評定したが、平等主義的性役割観者ではそういった差はなかった。また、本研究では、参加者が将来専業主夫/主婦になりたい程度を尋ねたところ、性役割観および母親の就業形態がかかわっていることが明らかとなった。

(1)-③-2 では、死すべき運命の顕現化が、専業主婦または専業主夫を選択した男性に対する評価に及ぼす効果を検討した。死すべき運命の顕現化の有無を操作した後、妻に専業主婦になってもらうことを希望し実現した男性と専業主夫になることを希望し実現した男性への印象を評定させた。結果として、女性参加者においては、一般的好意と異性愛の対象としての好意の両方で、伝統的性役割観を持つ女性では、死すべき運命が顕現化すると統制条件に比べて、伝統的な専業主婦型夫に対して好意が高くなるが、非伝統的な専業主夫型夫に対する好意が低くなった。一方、平等主義的性役割観を持つ女性では、死すべき運命が顕現化すると統制条件に比べて、伝統的な専業主婦型夫に対して好意が低くなるが、非伝統的な専業主夫型夫に対する好意が高くなった。この結果は、先行研究における、死すべき運命の顕現化が女性参加者の女性のサブカテゴリーに対する評価に対して与える影響と同じパターンであった。

(1)-③-3 では、一時的な自己表象の顕現化を操作して、女性からの男性サブカテゴリーへの潜在態度と顕在態度を検討した。実験の結果、潜在態度においては、家庭的な自己表象を活性化された参加者は、キャリア的な自己表象を活性化された参加者よりも、専業主夫に対してポジティブな態度となっていた。

このことから、男性サブカテゴリーについても、女性サブカテゴリーと同様に、活性化した自己表象に一致したカテゴリーに好意を示すことが明らかになった。顕在態度においては、個人的好意と一般的好意予測で異なっており、個人的好意では男性サブカテゴリー対象への態度に差は見られなかったが、一般的好意では、家庭的女性の自己が活性化している場合に特にキャリア男性が好まれるだろうと参加者は予測していた。

(1)-③-4 では、死すべき運命の顕現化（実験 1）とシステム脅威（実験 2）が、社会的に成功した男性（企業のエリート・サラリーマン）と社会的に失敗した男性（リストラにあって専業主夫）の評価に及ぼす効果を検討した。死すべき運命が顕現化すると、社会的に成功した男性に対する好意が高まり、社会的に失敗した男性の好意が低下した。また、死すべき運命が顕現化すると、社会的に成功している男性はより女性的であると、社会的に失敗している男性はより男性的であると評定され、ステレオタイプの適用が弱まる結果が得られた。一方、システム脅威の顕現化では、好意には影響は見られなかったが、社会的に成功している男性はより男性的に、社会的に失敗している男性はより女性的に評定された。つまり、ステレオタイプの適用に関して、死すべき運命の顕現化とシステム脅威では逆の結果が得られた。この結果は、(1)-②-1 と(1)-②-2 で報告した結果と対応するものである。これまでシステム脅威と死すべき運命の顕現化による脅威は、類似した効果を生み出すと考えられてきたが、システム脅威は社会的地位に基づいたステレオタイプの適用の強化を促進するのに対して、死すべき運命の顕現化は世界観に基づいた偏見を強化するという異なる効果を生み出すことが示された。

(1)-③-5 では、異性愛が顕現化すると女性から男性に対する評価がジェンダー・ステレオタイプを強化する方向で影響を受けるのかについて、親密な関係を対象として女性の自己概念の変化との関連から検討した。ブライムを用いた質問紙実験の結果、異性愛が顕現化しても女性の自己概念に変化はみられなかったが、親密な異性の男性的特性に関してステレオタイプの評価を強める傾向がみられた。また、通常時には自己を参照点として相手の性格特性を評価しているが、異性愛顕現時には自己評価とは関係なく相手の男性的特性を高く評価するようになることが示された。この結果は、少なくとも親密な関係においては、男女の相補的で相互依存的な関係が顕現化した状況では、女性が男性をジェンダー・システムに合致する方向で評価するようになることを示唆するものである。

#### (1)-④ 東日本大震災の影響

(1)-④では、日本のシステムへの脅威となった東日本大震災の前後での偏見の変化についてデータの再分析により検討した。

(1)-④-1 では、東日本大震災によって人々の持つ愛国心やステレオタイプが影響を受けている可能性について検討した。愛国心は震災前（2006 年時点）に比べ、震災後のほうが高くなっていた。また、日本人の人柄の良さも、震災前よりも震災後において高く評定されていた。こうした結果は、震災によるシステム脅威の高まりが、内集団である日本人に対する愛着やポジティブな評価を強めたことを示唆している。また、中国人に対しては「有能だが冷たい」といった相補的ステレオタイプが持たれていたが、こうしたステレオタイプは震災前（2008 年時点）よりも震災後において強くなっていた。この結果は、震災による現状のシステムに対する脅威の高まりが、外集団の相補的ステレオタイプを強めたことを示唆している。

(1)-④-2 では、東日本大震災によって性役割観が影響を受けている可能性について検討した。3 大学の同じ授業の 4 月時点での平等主義的性役割観尺度と慈愛的セクシズム尺度と敵意的セクシズム尺度の得点を、2008 年から 2011 年までの 4 年間の変化について検討したところ、震災後の 2011 年 4 月において、慈愛的セクシズムが 3 大学とも低下することが見いだされた。この結果は、東日本大震災がシステム脅威と受け取られ、伝統的性役割観を高めることによってシステムを防衛するといった過程ではなく、戦時や緊急時においては性役割がより平等的になるという過程が働いたことを示唆する。

#### (1)-⑤ 健康への脅威と防衛的偏見

(1)-⑤-1 では、感染症が顕現化すると、外国人一般に対する態度が影響を受けるのかについて検討した。実験では、海外の感染症に関する情報（感染症条件）または海外渡航に関する一般的注意事項（統制条件）を呈示した後、外国人に対する接近・回避傾向を測定した。結果として、感染症条件では統制条件に比べて、外国人に対する回避傾向が強くなっていた。この結果は、感染症に関する情報によって存在論的脅威が高まり、外集団である外国人を避けようとする傾向が強まることを示唆している。

(1)-⑤-2 では、感染症が顕現化すると、高齢者に対する偏見が強まるのかについて検討した。実験 1 では、大学生を対象に、感染症の顕現性を操作した後に、高齢者に対する顕在的偏見を測定した。高齢者と同居経験のない大学生において、感染症の顕現性は、高齢者への顕在的偏見を強めていたが、同居経験のある大学生においてはそうした効果はみられなかった。実験 2 では、看護学生を対象として、感染症への顕現性を操作した後に、

高齢者に対する潜在的偏見を測定した。その結果、看護師のアイデンティティの弱い参加者においては、感染症の顕現性は、高齢者への潜在的偏見を強めたが、アイデンティティの強い参加者においてはそうした効果は見られなかった。これらの結果は、高齢者に対する親密性をもつことが、感染症が顕現的となった状況における、高齢者への偏見を止揚する手立てとなることを示唆している。

## (2) システム再生産に寄与するステレオタイプ化と偏見の低減に向けて

### (2)-① システム脅威による偏見増大の止揚

(2)-①-1 では、存在脅威管理理論に基づく多くの研究で示されてきた、死すべき運命の顕現化によって生じる内集団びいきが、博愛概念の活性化によって止揚されるかを検討した。死すべき運命の顕現化に加え、博愛概念か日本文化をプライムし、その後、外国人留学生と日本人大学生のイメージを評定させた。結果として、日本文化をプライムした時には、死すべき運命が顕現化すると日本人大学生に比べた留学生への相対的評価が低下するが、博愛概念をプライムすると、死すべき運命が顕現化しても相対的評価は低下せず、有意ではないもののむしろ上昇していた。外集団に対する内集団との相対的評価において、死すべき運命の顕現化によるネガティブな効果が博愛概念のプライムによって止揚されることが明らかとなった。

(2)-①-2 では偏差値に基づく大学生ステレオタイプの適用の強化が、システム肯定化、および、自己肯定化によって止揚されるかを検討した。日本人男女大学生を参加者にして、システム脅威の有無を操作した。さらに、肯定化操作によって、統制条件とシステム肯定化条件と自己肯定化条件を設けた。その後、偏差値の高い外集団大学生と偏差値の低い外集団大学生と偏差値が同程度の外集団大学生と、自分が所属する内集団大学生のイメージに関して、温かさと有能さの次元で評定させた。女性参加者においては、システム脅威があると、地位に基づいた相補的ステレオタイプを適用する傾向が増大していたが、それに加え、脅威の操作とは独立に、システム肯定化条件や自己肯定化条件は、統制条件に比べて相補的ステレオタイプの適用が低下していた。同地位内集団大学生と外集団大学生の評定に関しては、男性参加者においてのみ、システム肯定化をすると、外集団成員への相対的評価が高まること示された。これらの結果は、システム肯定化や自己肯定化の操作が、地位に基づいた相補的で両面価値的なステレオタイプの適用を低下させること、また、システム肯定化が偏見を抑制することを示唆するものである。

### (2)-② ジェンダー・システムの再生産の止揚

(2)-②-1 では、「(男と比べて) 女は弱い」

というジェンダー・ステレオタイプに一致する、もしくは一致しない人物の想起が、強さに関する潜在的なジェンダー・ステレオタイプに及ぼす影響について検討した。「女は弱い」というジェンダー・ステレオタイプに一致する人物、もしくは一致しない人物のいずれかを想起させる際に、ステレオタイプに関連づけて想起させる条件と、関連づけずに想起させる条件を設けた。結果として、男性参加者では、ステレオタイプ一致人物想起条件においては、ステレオタイプに関連づけて想起した場合よりも関連づけずに想起した場合に、潜在的ステレオタイプが弱くなっていた。ステレオタイプ不一致人物想起条件においては逆に、ステレオタイプに関連づけずに想起した場合よりも関連づけて想起した場合に、潜在的ステレオタイプが弱くなっていた。一方で、こうした効果は女性参加者では見られなかった。この結果は、ジェンダー・ステレオタイプを潜在的に強く持つ男性参加者においてステレオタイプを低減させるには、ステレオタイプに一致しない人物をステレオタイプと関連づけて想起させることが有効であることを示唆するものである。

(2)-②-2 では、ジェンダーを表象する色の身体化が、ジェンダーに関する自己認知と性役割的偏見に及ぼす影響を検討した。男性参加者に青またはピンクの白衣を着用させた状態で従属変数を測定した。自尊心の低い参加者においてのみ、青い白衣を着たときよりもピンクの白衣を着たときのほうが自己を勢力と結びつける潜在的自己ステレオタイプ化が弱まった。また、ピンクの白衣を着たときのほうが、慈愛的セクシズムが弱まり、平等主義的性役割観が強まること示された。

(2)-②-3 では、ジェンダー・カテゴリーを操作して、男性の女性に対する、顕在的偏見やステレオタイプ(実験1)と潜在的偏見やステレオタイプ(実験2)の変容に及ぼす効果を検討した。男女の弁別性を高めた後で、男女を共通カテゴリーに含める操作をすると、顕在測度においては男性の女性に対する好意が高まること示された(実験1)。潜在測度においてはジェンダー・ステレオタイプの適用が強化されることが見いだされた(実験2)。これらの結果は、男女の違いと共通性を認識することが、一方では顕在的な偏見の低減という望ましい効果を生み出すが、他方では、潜在的なステレオタイプの強化を生み出す可能性を示している。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 6 件)

1. 沼崎誠・高林久美子・天野陽一(2013). 子どもを持つことと経済的に成功することによる象徴的不死—死すべき運命の顕

- 現化と性役割観が日本人男女大学生の持ちたい子どもの数と将来の理想収入に及ぼす効果— 首都大学東京 人文学報, 470, 39-52. (査読無)
2. 田戸岡好香・石井国雄 (2013). 日本人大学生における専業主夫・主婦イメージの調査：性役割観と母親の就業形態に注目して 帝京大学心理学紀要, 17, 15-26. (査読有)
  3. 石井国雄・沼崎誠 (2012). 自己価値への脅威が男性の女性に対する潜在的偏見に及ぼす影響 対人社会心理学研究, 12, 67-76. (査読有)
  4. 沼崎誠・天野陽一・石井国雄・廣瀬綾乃・高林久美子・埴田健司 (2012). 死すべき運命の顕現化と博愛プライムが内集団ひいきに及ぼす効果 首都大学東京 東京都立大学 人文学報, 455, 15-28. (査読無)  
<http://hdl.handle.net/10748/5083>
  5. 石井国雄・沼崎誠 (2011). 自己価値への脅威が男性のジェンダーに関する潜在的態度に及ぼす影響 社会心理学研究, 27, 24-30. (査読有)
  6. 高林久美子・沼崎誠 (2010). 女性による伝統的女性と非伝統的女性への偏見とステレオタイプの適用：潜在レベルからの検討 社会心理学研究, 26, 141-150. (査読有)
- 【学会発表】(計 12 件)
1. 沼崎誠・石井国雄・高林久美子・埴田健司 (2012). 死すべき運命の顕現化が偏差値に基づいたステレオタイプ適用に及ぼす効果 日本社会心理学会第 53 回大会発表論文集, 90.
  2. 天野陽一・沼崎誠・高林久美子・石井国雄 (2012). 異性愛の顕現化が親密な異性へのステレオタイプ適用に及ぼす影響 日本社会心理学会第 53 回大会発表論文集, 307.
  3. 石井国雄・沼崎誠(2012). ムードが内的偏見抑制動機による潜在的偏見の低減に及ぼす効果 日本社会心理学会第 53 回大会発表論文集, 309.
  4. 沼崎誠・石井国雄・高林久美子・埴田健司 (2012). 死すべき運命の顕現化が偏差値に基づいたステレオタイプ適用に及ぼす効果—死すべき運命の顕現化による脅威とシステムに対する脅威はステレオタイプ適用に異なった効果を持つか？— 日本心理学会第 76 回大会発表論文集.
  5. 沼崎誠・天野陽一・廣瀬綾乃・石井国雄・高林久美子・埴田健司(2011). 死すべき運命の顕現化と博愛プライムが外国人偏見に及ぼす効果 日本グループ・ダイナミクス学会第 58 回大会発表論文集.
  6. 沼崎誠・石井国雄・高林久美子・埴田健司 (2011). システム脅威が偏差値に基づいた大学ステレオタイプに及ぼす効果 日本心理学会第 75 回大会発表論文集.
  7. 沼崎誠・石井国雄・高林久美子・埴田健司 (2011). システム脅威が偏差値に基づいた大学ステレオタイプに及ぼす効果—高偏差値大学の学生を参加者にした検討— 日本社会心理学会第 52 回大会発表論文集, 15.
  8. 松崎圭佑・沼崎誠(2011). 人権プライミングがヒューリスティクスを用いた判断に及ぼす影響—マインドセットプライミングからの検討— 日本社会心理学会第 52 回大会発表論文集, 7.
  9. 天野陽一・沼崎誠・高林久美子・石井国雄・佐々木香織・松崎圭佑(2011). 異性愛の顕現化が女性への相補的な対人認知に及ぼす影響 日本社会心理学会第 52 回大会発表論文集, 358.
  10. Numazaki, M., Nakashima, R., Takabayashi, K., Ishii, K., & Amano, Y. (2011). System-justifying functions of the complementary stereotype of elite bureaucrats in Japan. Presented poster at The 12th annual Society of Personality and Social Psychology conference, San Antonio, USA.
  11. 沼崎誠(2010). 死すべき運命の顕現化が伝統的/非伝統的女性の頻度推定に及ぼす効果 日本社会心理学会第 51 回大会発表論文集, 16-17.
  12. 石井国雄・沼崎誠(2010). ムードが潜在的ステレオタイプ化に及ぼす効果の検討 日本社会心理学会第 51 回大会発表論文集, 502-503.
- 【その他】  
ホームページ  
<http://www27.atwiki.jp/numazaki/pages/28.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

沼崎 誠 (NUMAZAKI MAKOTO)  
首都大学東京・人文科学研究科・教授  
研究者番号：10228273

### (2) 研究協力者

天野 陽一 (AMANO YOICHI)  
首都大学東京・人文科学研究科・助教  
研究者番号：90571886  
石井 国雄 (ISHII KUNIO)  
明治学院大学・心理学部・助手  
研究者番号：40705208  
高林 久美子 (TAKABAYASHI KUMIKO)  
一橋大学・社会学研究科・特別研究員  
埴田健司 (HANITA KENJI)  
一橋大学・社会学研究科・D3  
田戸岡好香 (TADO'OKA YOSHIKA)  
一橋大学・社会学研究科・D3  
松崎圭佑 (MATSUZAKI KEISUKE)  
首都大学東京・人文科学研究科・D3